

# さわらび

## わらたけノビノビ会総会がありました

6月4日(月)、藤岡小学校においてわらたけノビノビ会総会が行われました。

会の前半は、児童会・生徒会からのそれぞれの取り組みについての紹介です。本校の生徒会執行部の2人も、生徒会スローガンや自分たちの成果と課題などを発表して、委員の皆さんからの質問に答えました。

Q 3校合同宿泊研修はどうでしたか？

A いろんな活動で普段話せない他校の人と話せて楽しかったです。

その他、「みんなが1つのことを楽しんでやろうっていうのは大事だから、この1年間でそういうことを探してほしい」という声や、竹屋敷の区長さんからは共同募金への協力についてのお礼もいただきました。

後半は、夜遅くなるので児童・生徒は退席して、おとなの委員さんだけで今年度の活動方針や内容を検討しました。

今年度の委員の皆様は、下記の通りです。

### <平成30年度わらたけノビノビ会委員> 敬称略

- 岡村祐一(会長/学校支援代表者) 小花一平(保PTA会長)
- 岡崎壮志(小PTA会長) 松田和彦(中PTA会長)
- 川村富男(藤岡地区区長会代表) 大崎朗(富山地区区長会代表)
- 平野義郎(竹屋敷民生委員) 尾崎明子(藤岡民生委員)
- 宮地淳(民生児童委員代表) 仙石和美(小ひまわり子ども教室)
- 谷口統(副会長/地元有識者) 谷崎順一(地域コーディネーター)
- 萩野稔(駐在所所長) 茨木佐知子(保育所長) 柴田満嗣(小校長)
- 渡辺昌幸(小教頭) 加用美美(小事務) 大塚明人(中校長)
- 黒田健二(中教頭) 岡崎恵(中学生徒会) 福留龍仁(児童会長)
- 松田良輝(児童会副会長) 外田さくら(生徒会長)
- 福留聖仁(生徒会副会長)

## 先生たちも学んでいます

各学校では、基本的には水曜日に「校内研」という時間を設定して、授業力向上・教職員の指導力向上を目的として、研修を行っています。その一環として、5/23(水)に「数学授業研究」を行いました。有田先生の授業を全員で参観、その後、ワークショップ形式で授業についての振り返りをしながら学びあいました。また、講師は西部教育事務所から招いています。



## 大月招待野球(6/2.3) 結果報告

- 1回戦 藤岡・中村西中 9-2 小筑紫中 (6回)
- 2回戦 藤岡・中村西中 1-8 西土佐中 (5回)

## 食中毒の菌はココに潜んでいます

気づかれないケースも多いのですが、食中毒は家庭でも発生しています。

### キッチンで注意したいのはココ

肉や魚などの食材のほか、食器洗い用のスポンジや、シンク、まな板、ふきんは食中毒の原因になる菌が付着しやすいと知られています。

### 手洗いにも注意

菌がついた手で調理したりあちこち触れたりすれば、菌を広げてしまいます。手洗いもしっかり。

### 加熱でやっつける

ついてしまっても中心まで十分に加熱すれば、多くは殺菌できます。



「梅雨時の安全シリーズ」として、前号から掲載していますが、疲れの蓄積しやすい時期でもあります。しっかり食べて、十分な睡眠も大事にしましょう。(朝の健康チェックでは23:00就寝が多いようですが、疲れていると感じたら早めに就寝しましょう。)

## ■連載・読み物シリーズ「郷土の偉人」(『高知の道徳』から)

人の一生は、何のためにあり、何を喜びとして生きているのか、誰を思って生き、何をより所としてその生涯を歩むのか。そんな答えのない問いを抱いたときに思い起こす先人の生き様がある。

### 保育の父 ～佐竹音次郎～

村にある古い松の木をじっと見上げる少年がいる。少年の名は佐竹音次郎。音次郎は、辛いことがあると天高くそびえるこの松の木を、時には願いを込めてじっとながめ、時にはそっと語りかけ、心を落ち着けていた。音次郎の心を松の木は知っていたのかも知れない。

佐竹音次郎は、今から150年ほど前に、下田村(現在の四万十市)の農家、宮村家の四男として生まれた。貧しい暮らしの中で多くの子どもを育てることができなかった時代、音次郎は中村町(現在の四万十市)の佐竹家へ養子に出された。音次郎、7歳、父母の手のぬくもりを感じはじめる頃のことであった。

佐竹家の養子となった音次郎であったが、年月の流れの中で養母と別れ、養父と2人で暮らすことになる。そして、家業の手伝いのため、あんなに好きだった寺子屋へも通えなくなり、次第にやつれていく。そんな音次郎の様子を見かねた実の父母は、音次郎が13歳のとき、学校へ行かせようと下田村へ呼び戻した。ところが父は家業を覚えさせるため、音次郎に学問を禁じ、15歳となった音次郎は学校を止めて、農作業を手伝わなければならなくなった。学問の道をあきらめきれずに、日に日に体を弱らせていく音次郎。父はその様子を見て、農業を教えることをあきらめ、とうとう音次郎が勉強することを許した。

喜んだ音次郎は、勉強に励み、23歳のときには東京の小学校に勤めるようになった。「困っている人や恵まれない人たちに助けたい」との天職に向かったの思いを、教員という1つの形として実らせていく。しかし、そこにとどまらず更に勉強に励み、29歳で医者となって神奈川県で医院を開設した。

(つづく)